

『東方』三〇四号より

出土資料研究

——次のステップへ

有馬卓也(徳島大学)

先に筆者(有馬・以下同じ)が本誌に著した戦国楚簡研究会(代表者湯浅邦弘)の『新出土資料と中国思想史』(『中国研究集刊』三三三号・二〇〇三)の書評「中国古代思想への新たななるいざない」(『東方』二八〇号・二〇〇四)から二年がたった。その間に同研究会(浅野裕一・湯浅邦弘・福田哲之・竹田健二・菅本大二——巻末の著者紹介の順による)は、

◇『諸子百家(再発見)——掘り起こされる古代中国思想』(岩波書店・二〇〇四)

◇『戦国楚簡と中国思想史研究』(『中国研究集刊』三六号・二〇〇四)

◇『竹簡が語る古代中国思想——上博楚簡研究』(汲古選書・二〇〇五)

◇『戦国楚簡研究二〇〇五』(『中国研究集刊』三八号・二〇〇五)

を刊行し、中心的存在の浅野氏は

◇『諸子百家』(講談社学術文庫・二〇〇四)

◇『戦国楚簡研究』(台湾万卷楼・二〇〇四)

◇『古代中国の文明観』(岩波新書・二〇〇五)

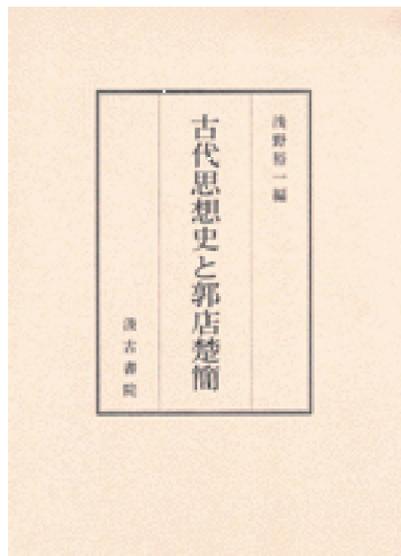
を出版している。そして、今回この『古代思想史と郭店楚簡』(汲古書院・二〇〇五)が上梓された。実に瞠目すべきペースで成果をあげている。

トップページにもどる

浅野裕一編

『古代思想史と郭店楚簡』

A5判・四〇八頁・汲古書院・一三、六五〇円



本研究会の郭店楚簡・上博楚簡(上海博物館蔵戦国楚簡)に対する基本的立場については、先の書評でも言及したが、本書の言を借りて再説しておこう。

「我々戦国楚簡研究会は、郭店楚簡や上博楚簡を戦国中期、紀元前三〇〇年頃に造営された楚墓から出土した文献と見る立場を取っている」(序文・浅野)

本書ではこの基本的立場の下に、郭店楚簡・上博楚簡の諸資料を解析し、さらにそこから従来の中国思想研究の中で、もはや成立し得ない説にも言及し、読者に通説の再考を促している。本書の総説(浅野)と『戦国楚簡研究二〇〇五』所収の「新出土資料と諸子百家」(浅野)からその代表例をいくつかあげてみよう。

儒家思想の場合、所謂「六経」の成立時期をめぐる諸問題が再考を求められている。たとえば、従来、始皇帝の焚書以降から漢初期に儒教の経典になったとされていた『周

『易』は、郭店楚簡の『六徳』や『語叢』一に見える記述からもはや成立し得ないとする。この他、『春秋』の成立時期の問題、郭店・上博の双方から出土した『緇衣』をめぐっての『礼記』の成立時期の問題、上博の『武王踐阼』『曾子立孝』をめぐる『大戴礼』の成立時期の問題、さらに郭店の『性自命出』と上博の『性情論』をめぐる『中庸』の成立時期の問題。そして上博の『魯邦大旱』をめぐる天人相関説の問題についてなどである。

また、道家思想の場合、現行本の『老子』『莊子』とに頼らざるを得なかった従来の道家研究に、馬王堆及び郭店の『老子』、及び郭店の『太一生水』と上博の『恆先』とが加わる事によつて多様なバリエーションの宇宙生成論を持つ道家思想が確認されることとなり、ここから中原の伝統的上天・上帝信仰とは一線を画する世界観を有するものとしての道家思想の再検討の必要性が示されている。そして、それを『楚辭』天問と関連づけて論及され、誠に興味深い。

このほか、兵家思想の場合について、上博の『曹沫之陳』の出現は、『孫子』の兵法の異質性を認識させられることとなり、ここから兵法思想そのものへの再検討の問題について触れられている。

字数の関係で詳細な紹介はできないが、大まかな問題の提示だけでも、これら戦国楚簡の出現がもたらした問題の重大さと多様さを理解していただければよい。これらは、いずれも今後古代思想を研究対象とする者が必ず念頭に置かねばならない事柄なのである。

以上の序文・総説に示された視座に基づいて、諸氏の各論が展開される。

本書における諸氏の各論は以下の通り。

▶ トップページにもどる

浅野

郭店楚簡『緇衣』の思想史的意義

『窮達以時』の「天人の分」について

『唐虞之道』の著作意図——禪讓と血縁相続をめぐって

『五行篇』の成立事情——郭店写本と馬王堆写本の比較

『春秋』の成立時期——平勢説の再検討

『太一生水』と『老子』の道

湯浅

『六徳』の全体構造と著作意図

『魯穆公問子思』における「忠臣」の思想

福田

『語叢』（一・二・三）の文献的性格

『語叢三』の再検討——竹簡の分類と排列

戦国簡牘文字における二様式

楚墓出土簡牘文字における位相

竹田

郭店楚簡『性自命出』と上博楚簡『性情論』との関係

郭店楚簡『性自命出』・上博楚簡『性情論』の性説

菅本

『尊徳義』における理想的統治

もとより本書がすべての戦国楚簡を取り上げているわけではなく、冒頭に提示した本研究会の他の著作と合わせ読むことによつて、現在まで明らかになっている戦国楚簡の全容がカバーできるようになっている（全体を概説的に紹介しているのが『新出土資料と中国思想史』（『中国研究集刊』三三三号）及び『戦国楚簡研究二〇〇五』（『中国研究集刊』三八号）である）。

さて、本書を一読すれば、既存資料をつかつて出土資料

を解析するというステップから、出土資料に基づいて伝存資料を再考するというステップへ古代思想研究が移行したということを変更して認識させられる(この点については昨年一二月に成城大学で開催された中国出土資料学会においてもどなたかが述べておられた)。

このことは、銀雀山や馬王堆、子彈庫などこれまでに出土した資料も含めて、これらがどれほどの広がり(エリア)の中で読まれたものであるのかという問い(その資料がどれほど後の思想に影響を及ぼし得たのかということ)とも関連してくる。これについては、慎重を期さねばならないのも事実だが、だからといって推定することや仮説を立てることから逃げてはならない。

たとえば、『淮南子』を中心とした淮南文化を専門とする筆者にとつては、春秋戦国から漢代にかけて、楚という地域がどれほど中原と異なる思想的特質を持っていたのかという点は重大な問題である。

一例を示すならば、浅野氏も道家思想の宇宙生成論の地域性の問題において言及しておられる屈原理解の問題がある。これは『淮南子』を生んだ文化背景とも関わってくる。考えるが、それは古くは藤野岩友氏の『巫系文学論』(大学書房・一九五二)に代表される屈原研究において必ず問題にされる「巫風」という楚文化とも関連してこよう。この点については、金谷治氏も『淮南子の思想』(講談社学術文庫・一九九二)の中で言及している。中原文化と一線を画するこの文化が、いかなる影響を秦漢の統一後にもたらしたのかという問題は非常に興味深い。加えて、この問題説明については、文字資料のみならず画像資料なども合わせ考える必要がある。筆者も含めた上での今後の課題と考えている。

▶ トップページにもどる

さて、本書は本研究会の

「同書(『郭店楚墓竹簡』(文物出版社))を概観して先ず想起されたのは、共同研究を組織化する必要性である。なぜなら、郭店楚簡は竹簡七百枚を越える膨大な分量であり、内容も儒家系・道家系などにまたがり、かつ先秦時代の見慣れぬ古文字で記されていたからである。とても一人で立ち向かえる研究対象ではないというのが率直な印象であった」(あとがき・湯浅)

という思いから出発し、

「このままの状況が続けば、中国や台湾、欧米の学者が戦国楚簡の研究にしのぎを削る白熱した状況の下、わが国の研究は大きく立ち後れ、世界の水準から取り残されてしまうであろう。……本書の刊行がこうした状況の打開にいささかでも役立てば」(序文・浅野)

という思いに基づいて著述されている。

本研究会の目的は、まさに達せられつつあると言つてよい。